

第11分科会

子どものための保・幼・小の 連携・接続の在り方

問題提起園 啓明幼稚園・保育園

問題提起者 松元 梨音

1 研究課題

子どもが育つ家庭や地域

2 研究・研修の視点

現代社会において、地域社会ではご近所付き合いなど大人同士の関わりや子ども同士の交流の場もなくなり、家庭においても核家族化、少子化が進む中、一人で悩みを抱える母親が孤立してしまうことも深刻な問題になっている。また、子どもの育ちにおいても生活習慣の未確立、コミュニケーション能力の低下、愛着障害等の多くの課題が指摘されている。こうした背景の下、幼稚園・認定こども園における子育て支援は、社会的にもますます重要なものとなってきている。各園では、相談、情報提供、親子登園、保護者同士の交流等、様々な形で支援に取り組み、子どもたちが安全に安心して生活できる環境を整えつつ、0歳からの発達を十分に理解して、保護者が子どもの成長に気付き、子育ての喜びを感じられるように、地域における幼児教育のセンター的役割を果たしていくことが期待されている。また、幼稚園・認定こども園は、小学校就学前までの特別なニーズのある子どもの保護者に対する育児、教育相談の知識も身に付けていく必要がある。近年、子どもの貧困、児童虐待、DVといった課題も浮き上がり、関係機関と連携しながら地域のネットワークを活用した支援体制を整えていくことも大事である。

小学校との連携については、幼稚園・認定こども園での生活が、小学校以降の生活や学習の基盤の育成に繋がることを踏まえ、何より幼児期に相応しい生活を通して、創造的な思考や主体的な生活態度等の基礎を培うことを念頭に置きつつ、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を踏まえて教育課程を編成し、幼児教育と小学校教育の共通理解を図るために、保育者との意見交換や合同の研究会を設け、円滑な接続を図るように努めていく。

幼稚園と小学校が願う方向は同じであるにしても、それぞれの教育の方法の違いを相互理解することから、連携・接続を進めることが大切である。そのために、「資質・能力の3つの柱」を軸に、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を観点において、遊び中心の幼児教育の中にある「学びの芽生え」と、教科学習中心の小学校教育の「自覚的な学び」の相互理解が重要である。

そして、違いを理解した上で幼児期における学びから小学校における学びへなめらかに移行できるように、接続期のカリキュラムを研究し実践することが求められていると考える。

3 主な研究・研修の内容と計画

- 一人一人の発達に即した保・幼・小連携をするためには、どのような工夫ができるか考える。
- 接続期カリキュラムを通して、園で育んできた「資質・能力の3つの柱」を軸に、小学校に繋げていくにはどのようにすればよいか、本園での取組や実践例を通して考える。
- 幼稚園と小学校の相互理解を深めるには、どのような方法がよいのか考える。

〔研究計画〕

令和2年度 ・ 子どもの育ちを見通して育んできた資質・能力をどのように活かし、小学校に繋げていくか実践例を通して考察する。

令和3年度 ・ 小学校との連携・接続のための教職員間、保護者、園児を含めた相互理解について研究する。

4 研究の概要

(1) 研究・研修テーマの捉え方

新しい時代を生きる子どもたちに必要な資質・能力をどのように身に付けていくのか、現在、始良市において幼・保・小の連携で取り組んでいる「始良市接続期カリキュラム」を通して考察していく。このカリキュラムの中で、本園での小学校接続に向けた取組の現状と課題について考える。

(2) 研究の内容

- ① 一人一人の発達に即した幼児教育（幼稚園教育）と小学校教育の違いを理解した上で、個と集団の育ちの相互関係について考える。
- ② 小学校接続へ向けて、幼児期の教育の取り組みについて事例研究を行う。

(3) 実践例・考察

① 個と集団の相互関係による育ち

ア 幼稚園等の集団と小学校の集団の違い

幼稚園等は、幼児が初めて家庭と離れて集団生活を体験する場である。入園当初の幼児の多くは、初めての集団への参加の仕方が分からず、戸惑う様子が見られる。だが、その戸惑いは、毎日の保育で保育者が一人一人の幼児に合わせた声掛けや支援を行い、人的環境や物的環境を整えることで集団生活に慣れていき、徐々に薄れていく。

〈事例：新しい環境への戸惑い（4歳）〉

A君がクラスに入れない、という事例があった。理由として考えられたのは、「たくさんの方がいる環境に慣れていない」「友達がなくて不安」「言葉で気持ちが伝えられない」「どこにいればいいのか分からない」等である。そこで保育者は、A君の傍にいて声掛けをしながら、まずは担任との愛着形成を図り、A君と一緒に「仲間に入れて」と言って友達と遊ぶ等しながら、他の園児との関わりを増やす援助を行った。すると、時間はかかったが、A君は自分からクラスに入ってこられるようになり、友達とよく遊ぶようになってきた。

つまり、幼稚園等の集団生活では、クラスという集団の中で、一人一人の幼児が安心できる居場所を確保できるように、保育者が幼児へ問いかけながら、意図的に答えを導いているのである。

それに対して、小学校での集団生活ではどうであろうか。幼稚園等より広い敷地、多い人数、自分とは違う学年との交流、教科による授業…というように、入学直後の環境の変化がとても大きい。小学校の教員の指導・支援のサポートを受けながらも、小学校という大きな集団の中で幼児は、自分で居場所を見つけたり、トラブルへの対応を考え、授業の答え等を導き出したしなくてはならない場面が多いと思われる。その環境の変化に幼児自身でついていくことができなければ、「小1プロブレム」の原因となる可能性がある。だからこそ、「自分で考える力」を小学校入学前に育んでいきたいところである。

イ 集団生活における「個」の学びと保育者の支援

「個」は、「集団」の中でも育まれる。「個」とは何か。「個人」とも受け取れるが、ここでは「個性」の意味を重視したい。個性という言葉には、「ある個人を特徴づけている性質・性格・その人固有の特性・パーソナリティ」という意味がある。つまり、子ども一人一人も、それ

ぞれが違った思いを持っている。違った思いを持った子どもたちが集まり、共に遊びながら関わり合うことにより経験を重ね、心身共に学びが生まれると考えられる。それでは、その学びを更に豊かにしていくためには、保育者はどのように導き、支援するべきなのか。事例を通して支援の在り方について見直し、考察する。

〈事例：玩具の取り合い（5歳）〉

N君は、温厚な反面、自己中心的で物や人に対しての独占欲が強い。H君も独占欲が強く、感情が抑えられなくなると衝動的に手が出ることもあるが、落ち着いている時は玩具を貸してあげることができる。2人とも友達のことが大好きで、同じグループ内でよく一緒にブロック遊びをしている。遊んでいる途中、床に落ちている赤色のブロックをH君が拾って使おうとすると、少し離れた場所にいたN君が、『そのブロックは、最初に僕が使ってた！』と怒ってH君から乱暴に取り上げてしまった。急に取られたH君は驚き、怒ってN君を押してしまう。そのあとN君が担任に『H君が押してきた！』と伝えに来た。

保育者が2人に「そのブロックは誰が使っていたの？」「どうしてH君は押しちゃったの？」と聞くと、N君は、『今は持ってなかったけど、僕のだった。H君が勝手に取って押してきた。』と言い、H君は、『落ちていて誰も使ってなかった。N君もそこにいなかったのに、急に取られて嫌だったから押した。』と言った。

保育者は、「N君はブロックを取られたと思って驚いたんだね。H君も、急に取られて嫌だったね。」「でもN君、H君は落ちていたのを使っていただけなのにN君から急に怒られて取られたらどう思うのかな？H君も、N君が押してきたらどう思う？」と問いかけた。

すると、両者共に『嫌な気持ちになる。』と答えたため、重ねて保育者は「そうだね。そしてブロックには名前が書いていないね。この赤いブロックは誰のブロックかな？また一緒に仲良く遊ぶにはどうしたらいいかな？」と問うと、2人から『みんなのブロック。』『順番に使う。』『ごめんねって言う。』という意見が出て、その場でお互いに謝り許し合った後、一緒に遊びを継続していた。

この2人にとっての発達の課題は、「物の共有」「相手の気持ちを考えること」である。

また、具体的に上の事例でいえば、N君は「譲り合うこと」であり、H君は「言葉で自分の気持ちを相手に伝えること」である。どれも集団生活だからこそ経験できることである。

保育者は、両者の気持ちを受容しながら話を聞き、ケンカの原因を明確にすることを心掛けている。そして問いかけをすることで、2人がお互いの気持ちに気付きながら、自分たちで解決の方法を見つけられるように促している。そうしたことで、N君、H君がお互いに相手の気持ちを考え、自分たちで解決方法を導き出すことができた。保育者は、全ての解決策をすぐに教えるのではなく、子どもの「考える力」を育むための手助けをするという意識を持つことが大切である。集団の中で人と関わることで、葛藤したり、相手を思いやったり、遊びを展開したり、競争心や協調性等が身に付けられるのではないかと考えられる。また、集団の中で自分の意見を相手に伝えたり、相手の意見に寄り添ったりできる子どもに育ってほしい。そうした意識を持ちながら保育に取り組み、集団生活の中で「個」が自立できるように保育者が導いていくことが大切である。

② 「子どものための保・幼・小の連携・接続について」

ア 始良市での保・幼・小連携の取組（資料1参照）

注：始良市では、平成25年に「始良市子育て基本条例」を施行している。その中において「幼・保・小」と明記

されている。

子どもたちの発達や学びの連続性を大切にしたい指導や保育を具体化するために、小学校と幼稚園・認定こども園・保育所等の教育的特性やねらいについて理解し、より良い連携の在り方について深めるために、「始良市ブロック幼保小連携研修会」が行われている。

○ 研修目的・ねらい

目の前の子どもたちの成長を後押しするための幼児期から小学校段階への切れ目のない円滑な接続を充実させる。

○ 職員の相互理解のための年間の取組

時 期	取 組 方 針
1 学期	小学校での授業参観を通して、各小学校でのスタートカリキュラムの推進状況を共通理解するとともに、新1年生の現状に関する情報交換を行う。
2 学期	講演等を通して幼保小連携の充実を図るとともに、各幼保等でのアプローチカリキュラムの推進状況を共有し、課題と解決策を探る。
3 学期	<ul style="list-style-type: none"> 幼保等での保育参観を通して、スタートカリキュラム及びアプローチカリキュラムの見直しのために、各校・園(所)での実践の成果と課題を共有し、次年度の共通実践事項について共通理解を図る。 次年度の新1年生児童に関する情報交換を行う。

○ 建昌幼ブロックでの具体的な話し合い内容

(建昌幼稚園ブロックには、啓明幼稚園・薫光幼稚園・エミールこども園等が含まれる。)

資料1の始良市接続期カリキュラムに基づいて、意見交換を行う。3つの自立から次年度の共通実践事項(取組の重点)を決め、それについて協議する。

(令和2年度)

	I 生活上の自立	II 学びの自立	III 精神的な自立
共通実践事項	就寝・起床時刻等を守り、生活リズムを整えることができる。	正しい姿勢で、人の話を最後まで聞くことができる。	自分の気持ちを自分の言葉で伝えることができる。
本園での取組	<ul style="list-style-type: none"> 『早寝・早起き・朝ごはん』の大切さを絵本等を通して知る。(E, F) 時計を意識して行動する。(D, E, F) 園便りや匂便り等を通して、家庭と協力し合って規則正しい生活を送る。(E, F) 周りの友だちの状況に合わせて自分のことを自分でしようとする。(D) 	<ul style="list-style-type: none"> 正しい姿勢が持続しない子どもが多いため、日頃保育の中で体幹を鍛えられる遊びをする。(C) 保育者の次の促しがあるまで集中し、椅子に座って待つことができる。(C) 相手の話を最後まで目を見て聞くようにする。(C) 意欲的に発表をして発言することを喜び、自信を持つ。(A, B, C) 	<ul style="list-style-type: none"> 毎朝、園の門で保育者に挨拶をして、友だち同士でも挨拶を交わすことができる。(H, I) 「ありがとう」や「ごめんなさい」を自分から言えるようになる。(H, I) 相手の気持ちを考え、言葉遣いや行動等に気をつけながら、保育者や友だちと関わり合う楽しさを味わうようにする。(H, I)

※ABC…HIの記号は**資料2**の「3つの自立」の中の分類分けである。

イ その他の本園での日頃の取組・実践例

I 生活上の自立

- ・ 年少児からトイレは和式トイレでできるようにしている。(E, F)
- ・ ハンカチをポケットに入れることを徹底し、手を洗ったら自分のハンカチで拭く習慣が身に付くようにしている。(E, F)
- ・ 毎日制服で登園し、体育服に着替えて日中過ごし、帰りに制服に着替えて降園する。ボタンを留める、シャツを入れる、服を畳む等、着替えの習慣が付くようにしている。(D, E)
- ・ 廊下を走らないように「廊下は歩きましょう」と肯定的な声掛けをしている。(F)
- ・ 年少児から自分の道具箱整理整頓や当番活動を行い、自分でできることの良さを感じられるようにする。(D)
- ・ 給食後、自分たちで雑巾掛けや机を拭いて掃除をすることで、綺麗になることの喜びを感じる。(D)

II 学びの自立

- ・ 年長時に急に平仮名を書く活動をするのではなく、年少『クレヨンあそび』、年中『せんこのあそび』、年長『あいうえお』と発達段階に合わせたワーク遊びに取り組んでいる。(A, B, C)
- ・ 登園後、主体的活動を多く取り入れ、自分で考える力や主体性を育てている。(A, B)
- ・ 毎日絵本の読み聞かせや子ども自身が絵本を読む時間を作っている。(B, C)

III 精神的な自立

- ・ 預かり保育は「縦割り保育」で行い、異年齢交流を楽しむ。年長・年中児は年下の友だちに対して思いやりの気持ちが持てるようにし、年少児は年上の友だちに感謝の気持ちや憧れの気持ちが持てるようにする。(G, H, I)
- ・ 運動会や発表会等、多くの行事を通して集団での活動の楽しさや、練習の過程を大切に、やり遂げた時の達成感や満足感をみんなで共感できることの喜びを感じる。(G)

ウ 考察

相互の保育参観や授業参観を通して、共通点や相違点が明確になり、子どもの発達や学びの連続性について共通認識を持つことができる。そして幼児教育と小学校教育における教育内容や方法を十分理解した上で、保育者は「今の学びがどのように育っていくのか」を、小学校教員は「今の学びがどのように育ってきたのか」を見通した全体的な計画及び教育課程の編成・実施が求められるのではないかと考える。

③ 小学校との交流

○ ねらい

- ・ 校内の様子や授業を見学することで、園生活の修了を意識し、入学への不安を取り除き期待を高める。
- ・ 小学生へ親しみや憧れの気持ちを持ち、一緒に過ごすことを喜ぶ。
- ・ 思ったことや疑問に感じたことを自分の言葉で伝え、応じてもらうことで言葉のやり取りを楽しむ。

○ 実績と成果

- ・ 1学期 お泊まり保育時に小学校を訪問し、校長先生の話の聞いたり校庭でうさぎと触れ合ったり等、小学校の魅力を感じることができる。
- ・ 2学期 園外保育でお弁当を持って小学校を訪問する。小学生と過ごすことで上級生に親

しみを持つことができる。

小学生が幼稚園を訪問し、出し物やゲーム遊びを一緒にすることで、交流を深め、小学生に憧れの気持ちを持つことができる。

- ・ 3学期 小学5年生に学校を案内してもらったり、質問コーナーを設けて学校生活について気になることを小学生へ質問をし、答えてもらったりする。入学して6年生に手伝いをしてもらうことが多いため、事前に交流があると安心して関わるができる。



○ 今後の課題

- ・ 入学してから給食に不安を感じる子どもが多いため、給食の様子を見学してもらい、給食時間の様子や小学生が食べる量、献立等を知る機会を作りたい。
- ・ 幼稚園の近隣の小学校や小規模特認校をお願いをして交流をしている現状であるが、交流がある小学校と交流がない小学校があるため、年度当初に小学校と連絡を取り計画を立てて毎年の恒例行事にしたい。
- ・ 年間を通して指導計画の中に交流を位置付けていきたい。

(4) まとめ

幼稚園教育要領によると、「連携」とは、子ども同士の交流、保育者と小学校教諭の相互理解や合同研修、幼稚園の子どもの姿を小学校に伝えること、さらに、交流を行っていくことを位置付けている。一方、「接続」とは、主にカリキュラムの接続を指し、幼児教育と小学校教育を繋いでいくことを示している。

幼稚園等での「学びの芽生え（無自覚な学び）」が、小学校、中学校、高等学校での「自覚的な学び」の基礎になる。幼稚園等は、小学校前に「学びに向かう力（学びへの興味・関心）」を育てる場所である。

「資質・能力の3つの柱」「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」は、小学校に入学する前に「できているべき」ということではない。全てができているようにという目標ではなく、その幼児自身の得意分野を見つけていくことで自信を付けさせてあげることや、「自分で考える力」を伸ばし、「自分で答えを導きだせるようになっていく」ことを目標にしてもいいのではないかと考える。

カリキュラムの「3つの自立」の中での取組を観点にして、子どもたちの生活にふさわしい遊びの中で主体性や協同性、創造力が育っていくことが大切だと受けとめる。そして、保育者自身が子ども

もたちの育ちを長期的に見通し、その見通しのもとで日々「いまここ」での子どもたちの生活の中で、活動の質をよりよいものにしていきたい。また、子どもの生活環境等も含めて小学校との連携・接続を更に深めていきたい。

(5) 今後の課題

○ 始良市には17の小学校と45の幼稚園・保育園・認定こども園があり、都市部において同じ小学校区の子どもたちが、複数の園から入学してくるため、1年生の発育状況など各園に情報提供を求めている状況である。そのため、保・幼・小の教師間の交流は活発である。

また、各学校で知りたい項目が違うことから、引継ぎ書類の様式が異なるため、様式の統一を幼稚園側から申し入れて今年度から統一した様式になる予定である。

小学校側からの意見の中に、指導要録の様式が、幼稚園・保育園・認定こども園で違うという意見があったため、今後統一していかなければならない。

○ 特別な支援を要する子どもの就学前の小学校との連携・接続を円滑に行っていききたい。小学校入学前から、小学校教諭との交流の機会を増やし、実際に園での様子を見に来てもらえるように、早めに対応策を話し合っておきたい。入学後も、小学校での様子を聞きながら、その幼児への支援を継続できるようにしたい。

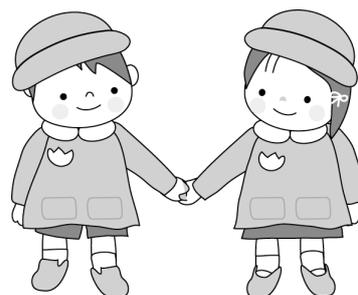
〈出典〉

資料1

始良市教育委員会作成 「始良市幼保小連携 接続期カリキュラムの手引き」より抜粋

資料2

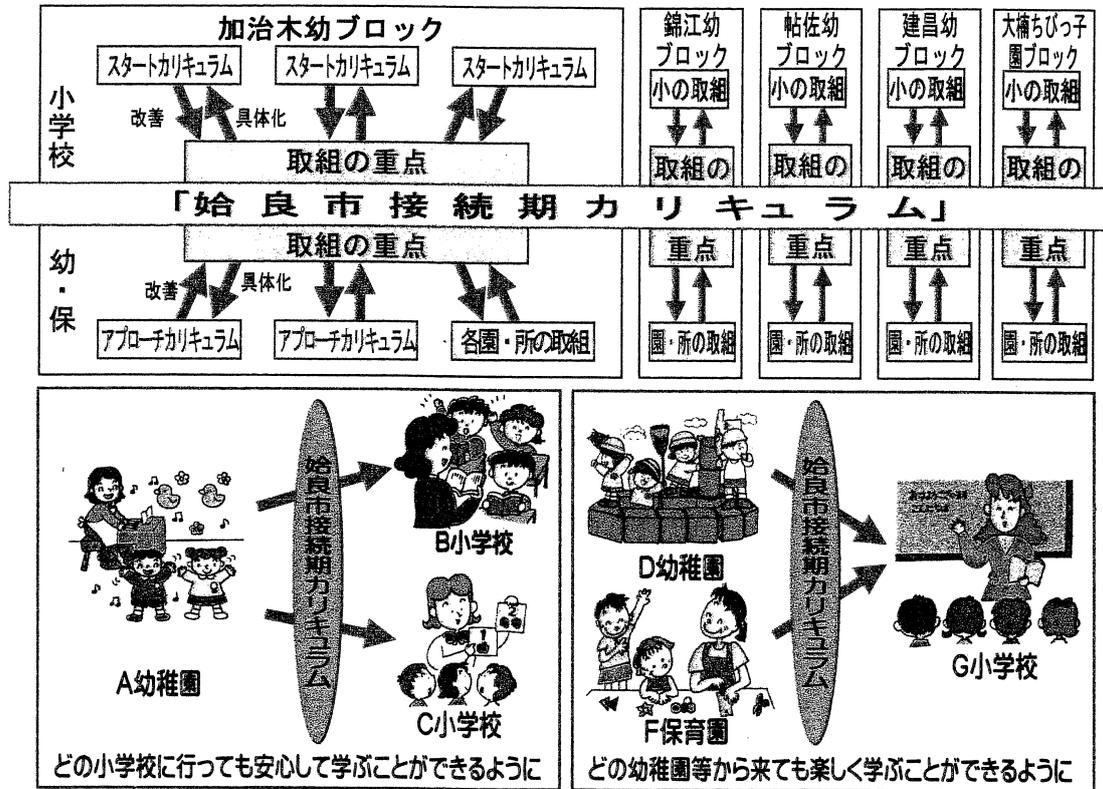
始良市教育委員会作成 「始良市接続期カリキュラム ～保幼小の学びをつなげよう～ R1.12.5改訂」



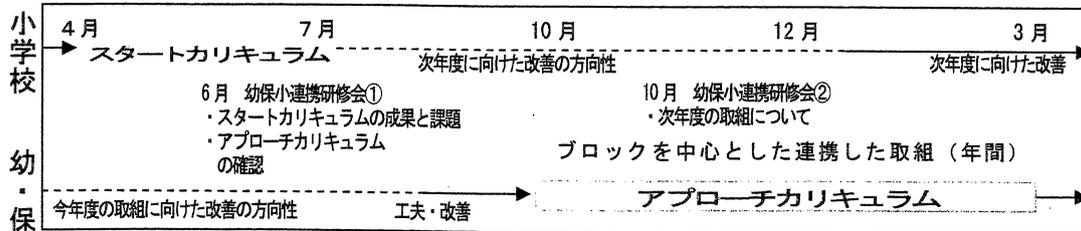
始良市の幼保小連携の基本的な考え方

◎ 始良市の幼保小連携についてのイメージ図

◆全体イメージ

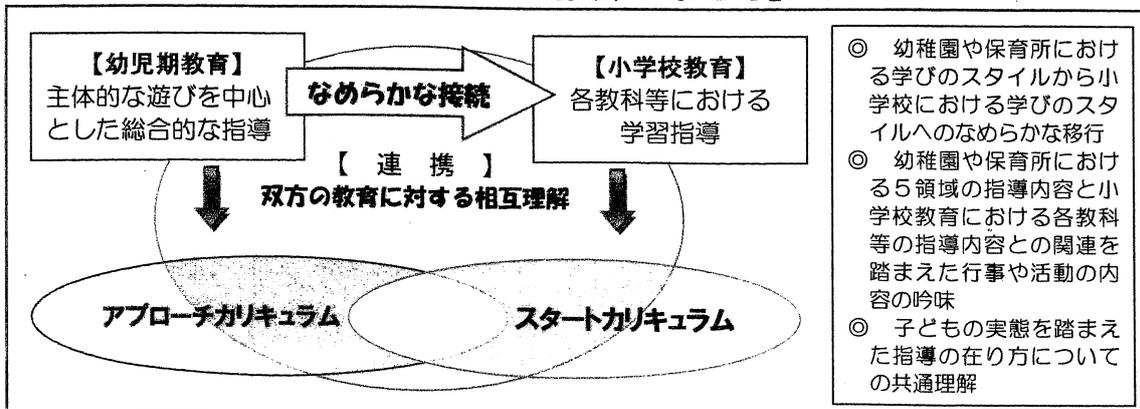


◆幼保小連携推進スケジュールのイメージ



「始良市接続期カリキュラム」の目指すもの

◎ 幼・保・小が協働で育てる「始良市の子ども」



始良市接続期カリキュラム ～保幼小の学びをつなげよう～ R1.12.5改訂

	<p>生活上の自立 環境の変化などに適応する力や身辺自立・生活習慣に関する力 整理整頓 食事 など</p>	<p>学びの自立 学習の基礎となる興味や関心、意欲、能力などを発揮する力 態度 創意・工夫 など</p>	<p>精神的な自立 様々な人とかかわりながら自己を発揮し、共に生活を作り出す力 規範意識 友達や担任との関係づくり など</p>
<p>小学校の取組例</p>	<p>決まった時刻に就寝・起床を整えることができる。 時計を意識して行動する経験を積み重ね、時間割などの設定された時間に合わせて小学校生活を送ることができるようになる。 日直や当番の仕事など自分でできることに取り組み経験を積んで、主体的に活動しようとする意欲が高まる。 TPOに合わせた服装を意識し、自分で着衣の汚れなどを整えることができる。 D 自分のおもちゃを自分で整理整頓できる子ども E 基本的な生活習慣を身に付けた子ども</p>	<p>基本的な発音の仕方を意識して自分なりの考えや気持ちを伝えたり、また、分からないことや難しいことは聞きながら粘り強く取り組んだりするようになる。 読み聞かせ活動を通して、音読や読書に対する興味・関心が高まっている。 正しい姿勢（目と耳と心）で人の話を聞くことや指示を最後まで聞いて活動することの大切さやよさを感ずることができる。 A 学び意欲をもった子ども B 表現できる子ども C 聞くことのできる子ども</p>	<p>集団生活や異年齢交流、意見を交わす中で新しい考えを生み出しながら工夫して取り組んだりするようになる。 日常生活や学校生活のルールやマナーについて、みんなの安全・安心な生活につながるなど、ルールやマナーの大切さやよさへの理解が深まっている。 G ルールを守ることのできる子ども H 思いやりのある子ども I 人のふれあいを大切にできる子ども</p>



<p>幼稚園・保育所・こども園の取組例</p>	<p>D 自分のおもちゃを自分で整理整頓できる子ども 給食準備のお手伝いをできるようにする。 当番や活動の準備、着替え、整理整頓など最後まで自分でできる経験を積み重ね、そのよさを感ずるようになる。 着衣の汚れなどに自ら気づき、自分で整えることができるようになる。 一日の活動の大まかな時間の見直しをもったり、活動の区切り時計を意識したりすることで、時間を意識した生活ができるようになる。 決まった時間に就寝し、起床することができるようになる。</p>	<p>A 自ら活動に取組む子ども 自ら遊びを考え、活動することのよさを感ずるようになる。 遊具に触れたり遊んだりすることを通して、体を動かすことのよさを感ずるようになる。 生物の飼育や栽培など、五感を使って感じることのできる活動をたくさん積み重ねている。 はさみの使い方、パスや色鉛筆の持ち方などを身に付けている。 みんなの前で発表をしたり聞いたりする経験を通して、発表することのよさを感ずるようになる。</p>	<p>G ルールを守ることのできる子ども ルールやきまりのあそびが、心地よく楽しい活動につながるようになる。 日常的なルールやマナーを大切にすることの必要性が分かるようになる。 集団生活や異年齢交流、地域の人々との交流などの経験を積み重ねて、人と触れ合ったり協力し合ったりすることのよさを感ずるようになる。</p>
<p>E 基本的な生活習慣を身に付けた子ども 食事のマナーや箸の正しい使い方を知り、みんなと食事することのよさを感ずるようになる。 食べ物の興味・関心が芽生え、好き嫌いをせずに食べることを感ずるようになる。 手を洗ったりスリッパを揃えたりなどを意識してトイレを使うようになる。 午睡がなくても、午後の活動に取り組み、気力や体力が育まれている。 積極的に外遊びや運動遊びに取り組み。</p>	<p>B 表現することを楽しい子ども 自ら遊びを考え、活動することのよさを感ずるようになる。 遊具に触れたり遊んだりすることを通して、体を動かすことのよさを感ずるようになる。 生物の飼育や栽培など、五感を使って感じることのできる活動をたくさん積み重ねている。 はさみの使い方、パスや色鉛筆の持ち方などを身に付けている。 みんなの前で発表をしたり聞いたりする経験を通して、発表することのよさを感ずるようになる。</p>	<p>H 思いやりのある子ども 先生や地域の人への態度や言葉遣いなどについて考え、ふさわしい態度や言葉遣いで応じるようになる。 考えや気持ちを自分なりの言葉で伝える経験を積み重ね、相手に考えや気持ちを伝わるよさを感ずるようになる。 友達のことを思いやり、優しくすることのできたよさを感ずるようになる。 あいさつや「ありがとう」「ごめんさい」が言えるようになる。</p>	<p>I 人のふれあいを大切にできる子ども 先生や地域の人への態度や言葉遣いなどについて考え、ふさわしい態度や言葉遣いで応じるようになる。 考えや気持ちを自分なりの言葉で伝える経験を積み重ね、相手に考えや気持ちを伝わるよさを感ずるようになる。 友達のことを思いやり、優しくすることのできたよさを感ずるようになる。 あいさつや「ありがとう」「ごめんさい」が言えるようになる。</p>